

令和元年6月19日現在

機関番号：32644

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16912

研究課題名（和文）岩手県内の近世石碑の数量分析および活用に関する調査・研究

研究課題名（英文）Research on quantitative analysis and utilization of early modern stone monuments in Iwate Prefecture

研究代表者

兼平 賢治（KANEHIRA, KENJI）

東海大学・文学部・准教授

研究者番号：30626742

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：これまで各市町村レベルで把握・分析がなされてきた石碑について、各自治体が刊行する石碑調査報告書などを基に県レベルで数量的・統計的に把握・分析を行い、より広域な範囲における石碑の種類や分布を検討し、県内の地域性を検討することが本研究の課題であった。

本研究の成果として、県域をほぼ網羅した石碑のデータベースを構築することができた。また、より精緻なデータを得るために、紫波町と岩泉町において悉皆調査を実施して石碑の把握に努めた。こうしたデータにもとづき、沿岸部と内陸部における石碑の種類や分布の違いを明らかにし、近世の盛岡藩領の歴史や文化を読み解く素材としての石碑の有用性を具体的に示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世の石碑について、これまで歴史的な記念碑として単体で紹介されたり、各市町村域のレベルで悉皆調査が行われることはあったが、より広範な県域レベルで数量的・統計的に把握して、その種類や分布のあり方について検討が加えられることはなかった。

そこで、県域レベルで石碑のデータベースを構築して検討を加えた結果、石碑の建立と分布には、各地域の歴史や文化、生業が密接に関わっており、石碑が地域の特質を解明する研究素材として有用であることを、具体的に示すことができた。また、研究の過程で成果報告会を開催したことにより、一般市民にも研究成果を還元し、石碑に対する関心を喚起し得たことは、本研究の貴重な成果であった。

研究成果の概要（英文）：The task of research is to clarify the characteristics of the area in the prefecture from the type and distribution of the stone monument.

Regarding the stone monuments of the early modern age in Iwate Prefecture, we grasped quantitatively and statistically based on the survey report etc published by each local government.

It was revealed that the type and distribution of the stone monuments reflect the history, culture and life practices of each region.

研究分野：日本近世史

キーワード：岩手県 石碑 地域 近世 石造物 盛岡藩

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の兼平は、東日本大震災で被災した岩手県の文化財に対するレスキュー活動を2011年5月から岩手県立博物館の学芸員とともに行ってきた（岩手県指定文化財の吉田家文書など）。また、岩手県では、歴史・民俗・考古の研究者が集まって岩手歴史民俗ネットワーク（以下、岩手ネット）が組織され、山田町・大槌町・陸前高田市を中心に文化財レスキュー活動を展開してきた（主に自治体に替わって被害状況を把握する活動）。

兼平は、こうした活動に参加するなかで、地域の民俗行事の核となり、地域の歴史を今に伝える石碑の多くが被災し、倒れたり津波に流されたりしている現状を知った。しかも復旧・復興が進むなかで瓦礫とともに撤去される恐れも日増しに高まっていた。

そこで、石碑の被災状況を把握する人員が不足していた自治体に替わって、岩手ネットが石碑の調査（順礼塔・馬頭観音・念仏講塔など）を開始した。特に教育委員会に協力する体制で悉皆調査を展開しているのが山田町である。同町は震災で甚大な被害を被った。

同町の石碑については、被災前に地元研究者らによってその多くが把握されていたことから、リストに掲載されている石碑を確認する調査を行った。新たな石碑も数多く発見され、これらをまとめて台帳を作成し、町に還元して活用してもらうことになっている。

把握した石碑を分析してみると、近世後期から幕末期にかけて西国順礼に関する石碑が多くみられることがわかった。岩手県の三陸沿岸（三閉伊）で発生した盛岡藩領の百姓一揆（三閉伊一揆）に関心を寄せる茶谷十六氏は、三陸沿岸に江戸時代を起源とする伝統芸能が数多く伝わっており、また石碑も数多く建てられている事実に注目して、そこに一揆につながる民衆力と民衆知の高まりをみている。森嘉兵衛氏も、西国順礼が百姓一揆の指導者の結束を強め、知識と教養を深める機会になっていたことを論じている（茶谷十六『安家村俊作 南部三閉伊一揆の民衆像』民衆社、1980年 / 森嘉兵衛『南部藩百姓一揆の研究』法政大学出版局、1974年）。

上記のことからは、近世の石碑が地域の歴史を読み解く資料として魅力的な素材であるといえそうだが、三陸沿岸の石碑の多さ、また、今回の山田町の調査で確認された西国順礼に関する石碑の多さが、この地域特有のものであるかどうかは、慎重に検討する必要がある。特に文化を共有する同じ藩領内において、地域差がどの程度みられるものかを確認したい。こうした関心から、研究を開始することになった。

2. 研究の目的

日本の中世史研究において板碑（供養塔）を扱った研究は数多く、その成果は中世史像をより豊かに描く上で重要な役割を果たしてきた。一方、数多く残されている近世の石碑（信仰石造物、墓は除く）は、特に注目されるものが個別的に紹介されたり、或いは多くの自治体が悉皆調査を行い所在リストを作成してはいるものの、まとまった数を分析することや石碑の残存状況から地域性を読み解こうとする研究はほとんどみられない。

そこで本研究は、設定した地域に残されている石碑の総体を分析対象とし、さらに他地域と比較することによって、石碑のもつ資料的価値の可能性を見極め、それをデータにして可視化し、今後の研究に資することを目的とする。また、本研究において、東日本大震災によって大きな被害を受けた被災地の歴史資料である石碑を取り上げ活用することで、失われかけた歴史資産の救済も目指す。

3. 研究の方法

研究計画を遂行するために、山田町の石碑調査を精力的に進めている八木光則氏（岩手考古学会会員・岩手大学客員教授）を研究協力者として研究体制を構築する。

平成28年度は、岩手県内の各自治体が刊行している石碑悉皆調査のリストや自治体史に掲載されているリストをもとに、それらの内容をデータ化し、数量分析するための基礎資料を作成する。また、岩手県における石碑の分布状況などから、地域の特徴の有無を見極めることをする。さらに、次年度以降に本格的に石碑調査を進めるため、準備調査を実施する。

平成29年度から平成30年度には、内陸部の自治体が作成した石碑リストを補完するために、必要な現地調査を実施する。また、その成果についても随時データ化し、分析を進めるとともに、講演会などの機会を利用して市民に成果を還元する。最終年度については、3年間の調査・研究の成果を、報告会を開催するなどして市民に還元するとともに、学術論文としてまとめることをする。

4. 研究成果

本研究の課題に迫るため、まずは岩手県域について、沿岸部と内陸部、旧盛岡藩領と旧仙台藩領などのように地域区分を設定した。そして、それら地域区分によって石碑の種類や分布に

差異がみられるかどうかを検討するために、データベースを構築する必要があった。データベースは、岩手県立図書館に所蔵されている各自治体史や自治体が刊行した石碑調査報告書などを基に作成した。基本的にはこのデータベースを分析対象として、傾向を確認することにした。県内自治体では、盛岡市、宮古市、大船渡市、花巻市、北上市、久慈市、遠野市、一関市、陸前高田市、釜石市、二戸市、八幡平市、奥州市、滝沢市、雫石町、葛巻町、岩手町、紫波町、矢巾町、西和賀町、金ケ崎町、平泉町、住田町、大槌町、山田町、岩泉町、田野畑村、普代村、軽米町、野田村、洋野町、一戸町の石碑については、データを入力済みである（ただし一部も含む）。九戸村については悉皆調査の成果報告書を入手できず、未入力であるが、おおよそ岩手県域をカバーしたデータベースを構築することができた。

こうしたデータベースのほかに、より精緻なデータを得るために、内陸部において報告書では未調査地域を含む紫波町について、補足悉皆調査を彦部地区（平成28年度）、佐比内地区（同29年度）、赤沢地区（同30年度）で実施した。紫波町の石碑を網羅的に調査した臼澤正充氏の『岩手の石碑』に収録されている彦部地区の石碑は174基、佐比内地区は235基、赤沢地区は190基であるが、本研究が実施した補足悉皆調査では、彦部地区260基、佐比内地区404基、赤沢地区463基を確認しており、新たな発見が相次いで、データの精度は大きく高まった。

いざ調査・研究をはじめたところ、初年の平成28年に異例な進路をとった台風第10号が岩手県を直撃し、甚大な被害をもたらした。特に岩泉町では、多くの犠牲者を出し、壊滅的な被害を受けた地域が多かった。被災地を目の当たりにしたことから、岩手ネットによる文化財のレスキュー活動にあわせて、八木氏とともに石碑の被害確認調査を実施することを教育委員会に申し入れた。岩泉の石碑に関する基礎データをもちあわせており、すぐに調査に活用できる状態にあったからである。教育委員会と地元の岩泉南部三閉伊一揆を語る会の会員のみなさんから協力を得られることになり、安家地区から調査に入った。被災して所在が確認できない石碑がほとんどみられなかったことは幸いであった。

教育委員会と岩泉南部三閉伊一揆を語る会の会員のみなさんによる協力のもと、八木氏とともに、岩泉町の石碑の悉皆調査を平成29年度（2017）から進めている。岩泉町内の石碑については、『岩泉地方史』（岩泉町、1980年）において451基紹介されているが、今回の悉皆調査では、安家地区77基、小本地区143基、有芸地区47基、岩泉地区146基、小川地区162基、大川地区48基と、2年の調査が終了した現時点で、把握している石碑はすでに623基に及んでいる。

この岩泉町で注目すべきは、内陸部の盛岡市、紫波町、矢巾町では確認されない「牛馬塔」、「牛馬供養塔」が54基確認されることである。そのうちの12基が江戸時代に建てられたものであるから、江戸時代の「牛馬塔」、「牛馬供養塔」建立の慣行が、その後も引き継がれたと考えられる。ちなみに、県内で江戸時代の「牛馬塔」、「牛馬供養塔」が確認されるのは、宮古市で10基、釜石市で4基（「牛馬諸霊塔」2基含む）、山田町で2基（「馬頭牛王供養塔」1基含む）、田野畑村2基、普代村で1基と、沿岸部に限られる。

それでは、内陸部はどうかというと、牛の供養碑がほとんど確認できないかわりに、馬の無病息災と供養のために建立される「馬頭観世音」の石碑が占める。江戸時代に建てられたものについてみると、盛岡市54基、紫波町92基、矢巾町47基、それぞれ確認できる。なお、岩泉町では8基しかみられない。

つまり、岩泉町の場合は、「馬頭観世音」の石碑の数よりも「牛馬塔」、「牛馬供養塔」の数が上回っており、馬のみでなく「牛馬」として供養しているところに特徴が見いだせよう。このような特徴が見いだされる背景には、盛岡藩領における牛馬の飼育状況が関係している。

馬産地であり南部馬で知られる盛岡藩領においては、馬の飼育頭数が多く、特に内陸部の岩手郡、紫波郡、稗貫郡、和賀郡、二戸郡では、馬の頭数が牛の頭数を圧倒している。こうしたなかで、馬の頭数には及ばないものの、他の郡に比べて閉伊郡と九戸郡は牛の飼育頭数が突出して多い点に注目したい。これは、閉伊郡にあっては「駄替」に大きく関係していよう。駄替とは、海産物や塩を内陸部に運んで売却し、米穀を購入して沿岸部に持ち帰ることを指すが、内陸部と沿岸部を往来するには北上山地を越える必要があった。この山越えは危険を伴うもので、「駄替」は、生活の糧を得るだけでなく、時に命を失う危険を含むものであったから、馬とともに牛の無病息災を願い、日頃の感謝や亡くなった牛への供養の気持ちが、岩泉の人びとには強かったのだろう。そのあらわれが、岩泉町に多くみられる「牛馬塔」、「牛馬供養塔」であり、その地域特有の歴史や文化、そして日々の営みが石碑に反映されている一例といえよう。

このように、地域によって石碑の種類や分布に差異があり、それが地域性を反映したものであることが確認できた。次に、沿岸部に数多くみられる「西国順礼塔」について研究結果を紹介する。

茶谷氏によると、「西国順礼塔」が沿岸部の田野畑村に44基確認できるとする。本研究の調査でも、江戸時代に建てられた「西国順礼塔」は、宮古市で96基、山田町で8基、岩泉町で30基確認できる。一方で内陸部については、盛岡市、紫波町、矢巾町ではみられない。なお、盛岡市では「西国三十三番供養塔」、「西国三十三ヶ所」、「西国三十三番」の3基、紫波町は「奉順礼西国三十三番補陀」1基、矢巾町は「西国三十三所塔」1基、それぞれ確認できることを付言しておく。

このような分布の差異をどのように捉えるべきだろうか。ひとつには、西国順礼に行く慣習が沿岸部に偏っていたとする見方もあろう。しかし、内陸部においても西国順礼・伊勢参詣に

出かけた際の道中記を見出すことは可能である。沿岸部の人びとにかかわらず、盛岡藩領の人びとは西国順礼・伊勢参詣をとおりて見聞を広めていたのである。

三閉伊一揆の指導者と西国順礼や「西国順礼塔」を結びつけた茶谷氏の視点は魅力的であり、そのことを否定するものではないが、それにとどまらず、西国順礼や伊勢参詣が盛岡藩領の人びとに与えた影響を問うことも魅力的だろう。

それでは、「西国順礼塔」の沿岸部と内陸部の分布の差異は、どのように考えたらよいのだろうか。実は、沿岸部と内陸部をつなぐ遠野市では、江戸時代に建立されたものが10基、宮古市と合併した内陸部の旧川井村では17基確認できる。また、盛岡市や紫波町、矢巾町ではみられないが、さらに内陸部に位置する雫石町では、「西国順礼供養塔」などが8基確認できることは興味深い。つまり、「西国順礼塔」については、(1)沿岸部に多く確認できること、(2)内陸部のなかでも盛岡市周辺にはほとんどみられないこと、(3)ただし内陸部であっても地域によっては10基以上確認できること、こうした結果から考えると、西国順礼をする慣習に偏りがあるのではなく、どの石碑を建立するのか、しないのか、そうした石碑をめぐる文化の違いのあらわれと考えるのが妥当ではないだろうか。

例えば、八木氏の成果によると、山田町内の「西国順礼塔」について、その分布を分析すると、数が突出して多い宮古市や岩泉町の一部を含んでいる宮古通に属する豊間根地区には多くみられ、大槌通に属する大沢・山田・織笠・船越地区には少ないという。八木氏はそこに、盛岡藩の代官支配区域である「通」による文化圏の形成をみる。また、八木氏は、梵字を刻んだ石碑が多くみられる地域と、梵字が刻まれていない石碑が多い地域とがみられることにも関心を寄せている。石碑をめぐるのは、「文化圏」がどのように形成されているのかを、より細かく分析する必要がありそうである。

「西国順礼塔」をめぐるのは、現時点では、西国巡礼を行っても、その記念塔である「西国順礼塔」を建立する地域と、そうではない地域があり、そうした石碑をめぐる文化圏を想定することが可能であることを指摘しておきたい。

最後に、紫波町佐比内地区の石碑調査において確認される、文字も何も刻まれていない白色の石（現在、「白碑」と仮称）が、ほかの石碑とともに祀られていることについて紹介したい。

佐比内地区は、江戸時代初期に盛岡藩の財政を支えたとされる金山が多く開発された佐比内村に相当し、僧ヶ沢金山、朴金山、平栗金山、釜ヶ沢金山などがあつた。現在でも石碑に供え物をする際の台石や民家の庭先に、金鉾石を粉砕するために使われていた石臼がみられるなど、産金盛んであつた名残をみることができる。なかでも朴金山は、京都出身の丹波弥十郎が多額の金額で請負つたことで有名であるが、その朴金山には、迫害から逃れた多くのキリシタンが、掘りに紛れて入り込んでいた。

調査をはじめた頃は、「白碑」は近くにあつた石を後世に石碑と誤つて祀るようになったものだと考え、調査対象から外していた。しかし、佐比内地区砥ヶ崎の調査において、隠れキリシタンの墓として現在も供養されている2軒のお宅の墓が19基あることを知り、これがまさに「白碑」であつたことから、再考を迫られた。朴金山跡にも9基の「白碑」がある。そこで、あらためて確認すると、砥ヶ崎の隠れキリシタンの墓に類似する「白碑」が、佐比内地区に6基、赤沢地区に5基あることを確認した。そして、これらの地区は、「佐比内北村家文書」の「金山証文」にもみえるように、金山があつた地域と一致しているのである。赤沢村には繫金山、舟久保村には舟久保金山があつた。

こうしたことから、「白碑」のすべてではないが、なかにはキリシタンの墓である可能性が高いものが含まれていると判断し、これまでの調査を精査して、「白碑」の基数を確定しているところである。石に何も刻まないことで、キリシタンの墓であることを隠していた。また、石碑のなかに紛れ込ませているのは、ほかの石碑を祀ると同時に、禁教と厳しい取締りのなかにあつた近世において、隠れキリシタンであつた先祖の墓である「白碑」を、少しでも怪しまれずに墓参できるようにするためではなからうか。

本研究の段階においては、「白碑」がキリシタンの墓である可能性を指摘し、今後慎重に検討を加えたい。

なお、紫波町の石碑調査の過程で「佐比内北村家文書」について調査する機会を得た。石碑調査は地域の歴史を掘り起こすことでもあるから、文書調査を実施して、学術論文を発表する際に、あわせて紹介した。

本研究では以上のような成果を得られたことから、講演会や報告会で市民に還元した。

5. 主な発表論文等 (研究代表者は下線)

[雑誌論文](計2件)

兼平 賢治、近世の石碑からみる地域の歴史 岩手県内の石碑調査をとおして、岩手史学研究、査読有、100号、2019年、39~59頁

八木 光則、今月の言葉 石碑と考古学、考古学ジャーナル、査読無、720号、2018年、1頁

〔学会発表〕(計 11 件)

兼平 賢治、石碑からみる地域の歴史 紫波町石碑悉皆調査中間報告、平成 30 年度発掘調査報告会・文化財セミナー、2019 年 3 月 16 日、紫波町情報交流館市民交流ステージ(岩手県紫波町)

八木 光則、山田町の石碑の現状 石碑悉皆調査総括報告、山田町の石碑報告と語る会、2019 年 3 月 2 日、山田町中央公民館(岩手県山田町)

兼平 賢治、石碑からわかる地域の歴史、ふるさと歴史講座小本・有芸の石碑を語る、2019 年 1 月 19 日、岩泉町小本津波防災センター(岩手県岩泉町)

八木 光則、小本・有芸の石碑調査報告、ふるさと歴史講座小本・有芸の石碑を語る、2019 年 1 月 19 日、岩泉町小本津波防災センター(岩手県岩泉町)

兼平 賢治、石碑にみる盛岡藩領の文化の様相、紫波町日詰公民館初心者古文書講座勉強会、2018 年 12 月 22 日、日詰公民館(岩手県紫波町)

兼平 賢治、石碑にみる盛岡藩の文化の様相、岩手県文化財愛護協会郷土史学習会、2018 年 11 月 21 日、盛岡八幡宮(岩手県盛岡市)

八木 光則、小川の石碑調査報告、ふるさと歴史講座、2018 年 7 月 21 日、小川支所(岩手県岩泉町)

兼平 賢治、岩手の石碑・岩泉の石碑、ふるさと歴史講座安家の石碑を語る、2017 年 12 月 7 日、岩泉町安家支所(岩手県岩泉町)

八木 光則、安家の石碑調査報告、ふるさと歴史講座安家の石碑を語る、2017 年 12 月 7 日、岩泉町安家支所(岩手県岩泉町)

八木 光則、三陸と岩泉町の石碑、岩泉町ふるさと歴史講座、2017 年 7 月 1 日、岩泉町町民会館(岩手県岩泉町)

兼平 賢治、江戸時代の盛岡と三閉伊地域、盛岡市西部公民館いわて学講座、2016 年 8 月 27 日、盛岡市西部公民館(岩手県盛岡市)

〔図書〕(計 1 件)

八木 光則、東洋書院、いわて民衆史発掘、2018 年、258 頁

6. 研究組織

研究協力者

研究協力者氏名：八木 光則

ローマ字氏名：YAGI MITHUNORI